
エヴァンゲリオン式号機パイロット・惣流アスカの更迭

朝陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エヴァンゲリオン式号機パイロット・惣流アスカの更迭

【Nコード】

N8523V

【作者名】

朝陽

【あらすじ】

シンクロ率の落ちたアスカは、式号機パイロットの地位から更迭され、ドイツへと強制送還される。

ドイツ支部に戻ったアスカを待っていたのは、組織ぐるみのいじめだった。

使徒との戦いが終わった後アスカの事が気になったシンジは、アスカがネルフ支部から脱走した事を知る。

シンジはアスカを追いかけてドイツへ行こうとするが、レイとの結婚を強く勧める父ゲンドウはそれを許さなかった。

2009年12月に「小説家になろう！」で公開した作品の加筆
修正版です。（作者IDの変更はありません）

第一話 アタシは用済み

アタシは惣流・アスカ・ラングレー。
エヴァンゲリオン貳号機専属パイロット、だった。
さっきまでは。

辞令

フィフスチルドレン 渚カヲルを貳号機専属パイロットに任命する。
セカンドチルドレン 惣流・アスカ・ラングレーを貳号機専属パイ
ロットから解任する。

さっき、ネルフ本部で聞いた辞令だ。これで、アタシの存在価値が
無くなった。

「アスカ、今まで御苦労さま」

リツコがそう言ってアタシの頭から赤いインターフェイス・ヘッド
セットを取り外す。長い間に一緒に居た古くからの相棒。

アタシはリツコがそれを回収するのを見て、本当にエヴァに乗れな
くなっただと自覚した。

アタシは先の使徒戦で、ファーストがひも状の使徒に襲われた時、
出撃したんだけど全くエヴァが動かせなくなってしまっていた。
使徒はシンジが出撃する前にファーストが一人で倒したみたい。

アタシの横で涼しい顔をして立っている。

悔しいという気持ちはもうすでに起こらなかった。

使徒戦の時にエントリープラグで漏らした眩きと同じく何もかもどうでもよかった。

「アスカ。今日こそは家に帰りなさい」

「……わかったわ」

アタシは今までミサトの家には帰らずにヒカリの家に入り浸っていた。シンジとミサトと一緒に居るだけでイラついて来るからだ。

「アスカ。帰るなら一緒に行こうか」

「……好きにすれば」

バカシンジのやつは嬉しそうにしている。

本当のバカね。

アタシが何のために帰るかわかってるの!?

帰り道でもシンジはしつこく話しかけて来た。

アタシは全部聞き流してやったけど、それでも話しかけて来る。本当にうざったい。

コンフォート17の『葛城』のネームプレートがかかった一室。少し前までのアタシの居場所。でももうここには居られない。

アタシは自分の部屋のドアにかけられた『許可なく立ち入りを禁ず。勝手に入ったら殺すわよ!』と書かれたプレートを外す。

そして部屋の中で荷物の整理をはじめたら、シンジがノックをして部屋に入って来た。

あのバカ、アタシがプレートを外した意味を勘違いしている。

「アスカ、ヘッドセットが無くて頭が寂しくなったんじゃないかな。だから、コレ」

シンジのやつは勝手に顔を赤くして、きれいにラッピングされた小箱を置いて部屋を出て行った。

アタシはその小箱に目もくれずに荷物の整理を始めた。でも、正直アタシはどうでもよかった。

だから服も最低限の物以外全て置いて行く。

ユニゾンの時の服とかレモン色のワンピースとか第壱中学校の制服とか関係なく全て置いて行く。

アタシは無意識のうちにシンジのくれた小箱だけ持って行く手荷物を入れるバッグの中に放り込んでいた。

「ええっ！？アスカがドイツに帰るってどういことですか？」

シンジの驚いた間抜け面を見て、アタシは胸がすつとしたような気がした。

別れる前にシンジに毒突いてやろうと思ったけど、そんな気持ちも無くなったわ。

「パイロットじゃなくなったから、本部に居る理由は無いのよ。ドイツ支部から帰還命令が出てるしね」

「そんな！アスカはそれでいいの？」

「シンジ。せいぜいファーストと仲良くやりなさいよ」

アタシはそう言って夕食の席を立った。

シンジはアタシのためにハンバーグを作ったみたいだけど、それをほとんど口にしないで部屋に閉じこもった。

それからシンジのやつがどうしたかは知らない。

アタシは翌日、誰の見送りも無いまま日本を飛び立った。

フィフスチルドレンがどんなやつなんて知りもしない。

顔を合わせる間もなくアタシは日本から叩きだされたのだから。

「よく戻って来れたな、我がネルフドイツ支部に。このドイツの恥じさらしが」

ネルフドイツ支部に戻って来たアタシは出発する時とは対照的に、粗略な扱いを受けた。

迎えに来た職員も下っ端の下っ端が一人だけ。

後はアタシが逃げないように見張る人間だけだ。

アタシはガードがつくほど重要な人物でもなくなっているみたいだ。ただ秘密をもらさないように見張られているだけ。

ドイツ支部ではアタシは失格人間、ドイツの恥さらしなどと呼ばれるようになっていた。

日本に行ったフィフス・チルドレンは高いシンクロ率を誇って使徒戦で目覚ましい活躍をしてるらしい。

アタシとは違って英雄扱いだ。

数カ月前までアタシがその位置に居たのに。

ネルフドイツ支部でアタシを待っていた仕事は、清掃員だった。

アタシにはわざと出世できるような仕事はさせないらしい。

組織ぐるみでアタシに嫌がらせをしてるのは明白だった。

「元パイロットのおチビちゃんよ。会議室の角にほこりが溜っていたぞ、きちんと掃除してるのかい」

「トイレ掃除早く頼むわよ」

アタシは今までした事のない掃除を一生懸命やったけど、散々文句や嫌味を言われた。

ドイツ支部でエースパイロットとしてもてはやされた時は、アタシの方が命令をする立場だったのに。

アタシの味方は誰も側に居なかった。

遠くの日本の方を見つめてアタシは来るはずの無い助けを求めることしかできなかった。

「誰か、アタシを守ってよ……ママ、加持さん、ミサト、……シンジ」

アタシがこんなどん底の生活を送るようになってから少しして、ゼーレが企んでいた人類補完計画の全貌が日本のネルフ本部によって明らかにされた。

シンジはサードインパクトを未然に防いだチルドレンとして、ファーストとフィフスチルドレンと一緒にネルフの主要人物になるみたい。

シンジは次期司令になるんじゃないかって噂されてる。

ネルフドイツ支部はゼーレと繋がっていたことがバレて大混乱を起こしていた。

だからアタシに対する監視の目も緩んでいた。

アタシは監視の目を振り切って、列車に乗って遠くに逃げようとした。

手荷物のバッグだけ持って連れ戻されないように出来るだけ遠くへ。アタシはあまりお金を持っていなかったから、列車で逃げるのも限界があった。

アタシは行ける範囲でギリギリの駅で列車を降りた。

駅の名前は『ヴィルヘルムスハーフェン』。

偶然にも式号機と一緒にアタシが日本に向けて出発した港のある場所だった。

アタシは徒歩で港の波止場へたどり着いた。

遠くで船の汽笛の音が聞こえる。

「海に落ちて溺れれば確実に死ねるかしら」

アタシはそう独り言をつぶやいて海に向かって歩いて行く。
でも疲労と空腹で足がなかなか進まない。

それでも前に進もうとすると後ろから誰かに腕をつかまれた。

「お嬢ちゃん！お前さん何をやってるんだい！」

「アタシには何も価値が無いの、死なせてよ！」

「何をバカな事いつてんだい！」

アタシは腕をつかんだドイツ人のおばさんに平手打ちをされた。

「若い子が死ぬなんて、バチが当たるよ！」

「アタシは生きていたって、もう何も良い事は無いのよ！」

そう叫んだ時、アタシのお腹の虫が盛大な音を立てた。

「何だ、お前さんお腹がすいているのかい。うちに来て御飯を食べれば暗い考えなんてぶっ飛ぶよ」

アタシはそのままおばさんに手を引かれて歩き出した。付いた場所は小さなレストランだった。

海が見える景色が良い場所に立てられたそのレストランには『海猫亭』とドイツ語で書かれた看板が付けられている。

「北条さん、今日は子連れかい？」

屈強な日本人の漁師に見える男の人がおばさんに声を掛けて来た。
アタシはこのおばさんをドイツ人と思い込んでいたので、日本語で話しかけられているのを見て驚いた。

「ああ、ちょっとお腹をすかせているみたいだからね」

「ところどころにアザみたいなのがあるじゃないか……いったいどうしたんだい？」

「その……今まで働いていた場所で色々あって……」

日本語で話しかけられた懐かしさからかアタシはつい日本語で答えてしまっていた。

「これは驚いた。お嬢ちゃん、日本語が達者だね」

「あらまあ、日本に住んでいたのかい？」

「アタシ、日本人の血が混じったクォーターだから。アスカっています」

「私の旦那は日本人だったから日本語がわかるのだ。私は北条マリアっていうのさ」

「俺はさすらいのツナ捕り名人、北島サブって言うんだ。よろしくな」

何か漁師さんの名前は嘘っぽく感じるけど、そんなことは今のアタシにとってはどうでもいい。

その巨体と豪快な態度はいかにも本物の漁師だと思った。

私はサブさんと別れて、食堂に併設された住居の中に案内された。

「ほら、ここが私の家だよ」

「し、失礼します」

「私一人しか住んでないんだ、遠慮することは無いよ」

アタシの服はよれよれだったから、マリアおばさんに着替えるように言われた。

おばさんの娘さんの服に着替えていると、アタシの体に出来た傷を見ておばさんが怒ったような声を出した。

「こんなに白くてきれいな肌なのにアザを作られちゃって……ま
ったくひどいやつがいるもんだね」

おばさんはアタシが着替えると、市場で買ってきた食材を持ってそ
そくさと調理場に向かっていった。

そういえば、おばさんは食堂を経営しているんだっけ。
調理場の方からおばさんが料理をする音が聞こえる。

リズムの良い包丁の音が聞こえる所を見ると、何かまな板で切っ
ているのだろっ。

「さあ、お腹がすいているだろう。たっぷりとお食べ」

おばさんが持つて来たのは和風の定食だった。

純粹に日本の物じゃなくてアレنجジが加えてあるけど、アタシに日
本での食事を思い出させるのは十分だった。

アタシが口を付けると、懐かしい味が広がった。

そして、胸が暖かくなるような気持ちに包まれた。

アタシはシンジと楽しい家族ごっこをしていた日々を思い出した。

シンジは今ごろどうしているんだろう……。

きつとネルフの次期司令として期待されているんだろうけど……。

ファーストのやつがいるから大丈夫よね……。

アタシにはネルフに居場所はないんだ……。

エヴァンゲリオン式号機のパイロットを更迭させられたんだから……

……。

アタシはシンジの事を思い出すと涙を流していた。

ファーストのやつと楽しそうに話しているシンジを思い浮かべると
胸がズキズキした。

「おやおや、涙を流すほどおいしかったのかい？」

「いえ、ちよつと昔の事を思い出しちゃって」

「冗談さ。……それより、もう死んでしまふなんて考えは捨てられたのかい？」

「……まだわかりません」

「んじゃ、とりあえずウチの食堂で住み込みで働くかい？」

「アタシ、料理も掃除もできない、役立たずな価値の無い人間なんです」

アタシは突然の提案に慌てて自分を卑下して答えた。

「私やずっと一人でこの食堂をやっているんだけど、お前さんみたいなかわいい子に看板娘になって欲しいんだ。仕事なんて少しずつ覚えればいい。手伝ってくれないかい？」

「え、でも……」

アタシが目を伏せて黙り込んでしまうと、おばさんは意地悪そうな声で言いだした。

「働かざるもの、食うべからずってことわざが日本にはあるわよね」
「うぐ、わ、わかったわよ」

「そうそう、これからは家族同然なんだから遠慮も敬語も無しでいいよ」

「じゃあ失礼ついでにアタシからも一つ、いい？」

「なんだい？」

「マリアおばさまのこと、ママって呼んでいい？」

「かまわないさ。私も10年ぶりに娘を抱けて嬉しいよ」

おばさんはアタシをしっかりと抱きしめてくれた。アタシは部屋の隅に家族の写真が飾られていたのを見つけた。

旦那さんと娘さんみたいだ。旦那さんは真面目な日本人って感じ。

娘さんは瞳の色や髪の色は違っけど、アタシと同じ紅茶色の髪の毛だった。

二人とも10年前の海難事故で死んでしまったみたい。おばさんだけ事故で生き残ってしまったそうだ。

「アタシ、娘さんの代わりになれる？」

「アスカちゃん、アスカちゃんじゃないか！何言ってるんだい」

おばさんは豪快に笑い飛ばした。

「でも、本当の娘にしたいっていうのは嘘じゃないさ。この店もアスカちゃんに後を継いでもらう気でいるし」

アタシは考えた。

ネルフに戻ってもまたいじめられるだけ。それなら全てを捨ててここで暮らそうと。

そうすればアタシが淡い思いを抱いたシンジの事も忘れられる……。

「うん、よろしくお願い、ママ」

「アスカちゃん、ちょっと頭が寂しいね……何かアクセサリーでも付けたら似合うと思うんだけど……」

アタシはそう言われて、手荷物の中にある包装紙に包まれたままの小箱の事を思い出した。

急いでバッグの中から取り出す。

『アスカ、ヘッドセットが無くて頭が寂しくなったんじゃないかな。だから、コレ』

確かシンジはそんなことを言っていた。

すでに箱はボロボロになっていたけど、震える手で包装紙をむしり取り箱を開ける。

中には真っ赤なリボンが入っていた。

シンジがアタシのために勇気を出して買ってきて、あの日やっと渡してくれたんだろう。

「シンジ……」

アタシは赤いリボンを握りしめて涙を流していた。

もっと早くシンジに対して優しくしてあげればよかった。

シンジのまごころがアタシに届いたのは遅すぎたのだ。

「おやおや、そんなに強く握ったらリボンがしわになってしまうんじゃないか」

アンおばさんはアタシからリボンを受け取ると、頭に付けてくれた。

「ほら、アスカちゃんがますますかわいくなった」

アタシは鏡に映った自分の姿を見ながら、頭に付けた赤いリボンを優しくそつと撫でていた。

アタシはその日惣流・アスカ・ラングレーの名前を捨てて、北条アスカとなった。

うん、アタシはこれから元気にやっていける。

完全に忘れ切るまでは時間がかかるけど、さようなら、シンジ。

第二話 僕は一人ぼっち

ここはネルフの本部の総司令室。

僕が使徒との戦いを終えて3週間が過ぎていた。

僕は冬月さんと一緒に父さんの側で仕事を手伝っている。

父さんはやっぱり僕を本気で司令にするつもりなのかな？

父さんの側に居ないときは帝王学とか組織を動かすトップとしての学問を学ばさせられている。

「碇君。次は日本政府の要人との会談があるわ。支度して」

「うん、分かったよ綾波」

綾波はまるで秘書のように僕の側についていてくれている。

でもこの綾波は僕の知っている『2人目』の綾波レイじゃない。

ひも状の使徒を倒そうとして、零号機は自爆してしまったんだ。式号機に乗っているカヲル君と、初号機に乗っている僕の前で。

『私はあなたを知らない。多分3人目だから』

自爆したはずの綾波が生きていたと聞いて僕は急いで綾波の元に向かった。

綾波は頭に包帯を巻いているだけで大した怪我もしていなかったけど、嬉しそうに話しかける僕に向かってそう言ったんだ。

僕はその時綾波が何でそんなことを言ったのかわからなかった。

でもあの日……リツコさんに呼び出された僕は見てしまったんだ。

大きな水槽の中に浮かぶ綾波の『代わり』を。

リツコさんは丁寧にも今の綾波が3人目だと言うことも教えてくれた。

代替わりした綾波は僕との記憶をほとんど失ってしまっていると言

うことも。

「碇君。元気が無いけど、渚君の事を考えているの？」

「……それは、綾波の方じゃないかな」

そう言われて、綾波は少しだけ表情を硬くした。

僕はほんの少しの変化を感じ取ることができた。

3人目の綾波は、同じ使徒だったカヲル君に魅かれていたと思う。

僕と綾波の間にあった絆とは違う、同じ使徒だったから感じていた繋がり。

カヲル君は、僕にとっては最悪な事に、最後の使徒だったんだ。

零号機の自爆で、第三新東京市の大部分が巨大な湖になってしまった。

そして、住む場所を失ったトウジ、ケンスケ、委員長は第三新東京市から離れて行った。

その後に僕にできた大切な友だちだったのに。

『君は好意に値するよ。好きってことさ』

カヲル君には生きていて欲しかった。

僕を好きだって言ってくれたから。

でも父さんやミサトさん、ネルフの大人たちは倒すべき敵だといって退かなかった。

僕はカヲル君をつかむ事は出来たけど、握りつぶすことは出来なかった。

だけど初号機が……勝手に動いて手に力を込めたんだ。

握りつぶす感覚だけははつきりと覚えている。

カヲル君は式号機を自由に操ることができたから、初号機も動かしただのか、それとも初号機が自分の意思で……コアの中に眠っていた母さんが動かしただのか。

今となつては僕にはわからなかった。

使徒戦が終わった後、ゼーレから9体のエヴァ量産機が攻めて来た。本当は戦略自衛隊も駆り出して攻めてくる予定だったみたいだけど、式号機はパイロットが居なくて起動できないから、量産機だけで勝てると思つたみたいだ。

僕が量産機を迎え撃つために出撃すると、目の前で信じられない事が起こっていた。

量産機が同士討ちをしていたんだ。

量産機を動かしていたダミープラグはカヲル君のデータが元になっていたようだつた。

自傷願望があつたカヲル君のデータが引き起こしたとリツコさんは言っていたけど、僕はそうは思わなかった。

カヲル君は僕たちに未来への勝利をくれたんだと思う。カヲル君は僕たちに未来を生き続けろと言ってくれたんだ。

量産機が同士討ちによつて全滅した後、僕は初号機から降ろされて、代わりに綾波が乗り込んだ。

綾波は前の僕みたいに高シンクロ状態になってエヴァの中で溶けてしまったけど、サルベージによつてまた戻ってくることができたんだ。

綾波が戻つて来たとき、もう体は完全な人間に再構成されていた。肌も色素が足りないアルビノじゃなくて日本人と変わらない肌色をしている。

目も赤い目じゃなくなっていた。

初号機のコアからサルベージされたのは綾波一人じゃなかったんだ。10年振りに再会した母さん。

小さいころ僕の側から勝手に居なくなつた人。

人類が生きていた証を残すとか宇宙の神秘を解き明かすとか僕にはさっぱりわからない高尚な目的を持っていたようだけど、身勝手な人には変わりは無かつた。

『僕は立派な意志を貫く科学者よりも、子供の僕の事を考えてくれる普通の母さんに居て欲しかった』

僕が母さんに向かって話した言葉はそれだけだ。

母さんはあれから僕にとって付けたように優しく接しようとしたり、言い訳をしたりしていたけど、僕が無視を続けると、そのうち自分の好きな研究にのめり込むようになった。

偽りの家族愛なんて僕は要らない。

父さんはなんであんな母さんと一緒に住んでいるのかわからない。

僕は母さんとの同居だけは拒否した。

そしてミサトさんとの同居を続けたんだ。

普通は次期司令が元作戦部長と暮らすことはないんだけど、それだけは許してくれた。

でも、困ったことに父さんは綾波とも同居することを押し付けて来た。

僕はそれだけは断りきることができなかった。

『頼む、シンジ。レイと一緒にになってくれ。それがレイの望みなんだ』

父さんはそう言って頭を下げて来た。でも父さんは勘違いをしている。

前の2人目の綾波は僕に好意を持っていた……かどつかはわからないけど、3人目の綾波はカヲル君の事が好きなんだ。

そんな綾波と一緒に暮らして……僕はどうすればいいんだ。

以前アスカの居た部屋は綾波が使っている。

僕は寂しさを覚えながら今日も眠りについた。

その夜に限って、僕は不思議な夢を見た。

僕は行った事もないのに、そこがネルフのドイツ支部だって言う事がなぜか分かったんだ。

そこにはネルフの職員に取り囲まれているアスカの姿。

「ほら、まだ汚れが落ちてない！こんないい加減な仕事で許されるとおもってるの!？」

「ご、ごめんなさい」

清掃員の服を着ているアスカがネルフの制服を着た女性職員にほおをはたかれた。

「お前なんかエヴァに乗れなければただのガキなんだよ!」

別の男性職員に口汚く罵られたアスカはついに泣きだしてしまう。

「泣けば許してもらえと思ってるのか、このただ飯喰らい!」

さらに別の男性職員がアスカのお腹を蹴り飛ばす。

アスカを取り囲む野次馬が笑い声をあげる。

アスカは目をこすって泣いていた。

「誰かアタシを助けてよ……ママ、加持さん、ミサト……シンジイ
ーーーー!」

僕はアスカの叫び声で目を覚ました。

今のは夢にしては凄く現実的に感じられた。

僕は部屋から飛び出ると、眠っているミサトさんを叩き起こした。

「何よーシンちゃん、こんな夜中に……」

「アスカは、アスカはどうしているんですか!？」

「アスカはネルフのドイツ支部にいるんでしょう、多分」

「いじめにあっていたりしませんか!？」

「シンちゃん、落ち着いて、明日調べてあげるから」

僕は自分の部屋に戻った。

気が晴れなかったけど、その後はいつの間にか眠り込んでいたみたいで、綾波に起こされた。

僕はいつものようにネルフに向かって、父さんの側で仕事を手伝う。いつもと変わらない一日が始まった。

ちよつと時間があつたので、僕はミサトさんをこっそりと屋上へ呼び出した。

何を心配したのか、リツコさんも一緒について来た。

ミサトさんとリツコさんは気まずそうに顔を見合わせると、重い口を開いた。

「アスカはドイツ支部に行ってから、ろくな仕事も与えられずに清掃員にさせられていたわ……」

「ネルフ職員のほとんどがアスカのいじめに関与していたそうよ」

「そして、ゼーレの事が公表されて、ドイツ支部が混乱に陥った時、アスカはロストしたわ」

「そんな！今はどこにいるかわからないの！？ミサトさん、アスカを探してよ！アスカを助けてよ！」

「それは無理ね……ドイツはアスカの事を闇に葬ろうとしている」
「どこかで野垂れ死んでくれた方が都合が良いと思っているのよ」

そんな……アスカが……死ぬなんて……

「アスカアアアアー！」

僕はゆっくりと後ろに倒れて行って、階段を滑り落ちていくのを感じて、意識を失った。

アスカがドイツに強制送還されてから2年が過ぎていた。

僕は高校1年生として学校に通っていた。

僕は階段から落ちてから5カ月ほど入院していたようだった。

僕は怪我をする前と変わらない生活を送っていた。

でも何かすつぽりと抜け落ちている記憶があるのを感じていた。

「シンジ君、昨日もレイと一緒に夫婦同伴だって冷やかされたんだって?」

僕はミサトさんと綾波の分の食事を作ると、冷やかすように話しかけて来た。

「からかわないでくださいよ。僕と綾波は単なる同居人ですから」「そうよ」

またその話か……どうしてミサトさんは僕と綾波をくつつけたがるんだろう。

綾波が僕に異性としての好意を持っていない事はわかるのに。

「本当に、付き合う気は無いの?」

「しつこいですよ、ミサトさん」

「あはは……司令に何ていえばいいのか」

「何で父さんが関係するんですか?」

「今の聞こえた!? シンちゃん今のは聞かなかったことにして!」

そう言うとミサトさんは僕の追及を逃れるようにあわてて家をでていった。

ミサトさんが出て行った後、僕と綾波はいつものように朝食をとって学校に行った。

学校につくと、僕は授業の予習を始めた。

学校では友だちは出来なかった。

美人で通っている綾波と話す僕が気に入らないと言う人も居たし、僕が司令の息子だという情報もいつの間にか漏れていて、七光りという不名誉なあだ名もついていた。

僕は次期司令として恥ずかしくない成績を残すために、学校のテストなども頑張らないといけなかった。

だから僕自身にも友だちを作ろうとする暇が無かった。

何のためにこんなに勉強しているのか、むなしく思えた。

僕は昼休みは屋上で、流れ行く雲を眺めながら空想にふける日々を続けた。

エヴァンゲリオンに乗って戦っていたところが懐かしいな……。

綾波と一緒に使徒と戦って、カヲル君が最後の使徒だったり。

辛いことや楽しい事も色々あった……

そんな僕の頭に、聞き覚えがあるような女の子の声が響いて来る。

『アンタがサードチルドレン？ふーん、さえないわね』

『キス……した事無いんでしょ』

『内罰的なところに腹が立つのよ！』

『バカ……無理しちゃって』

脳裏に浮かぶイメージで紅茶色の長い髪をした女の子が僕に話しかけて来る。

……君は誰？

僕がいつもの一日を終えて家に帰ると、ミサトさんが待っていた。

「あら、シンちゃん。今日はレイと一緒にじゃないの？」

「なんかリツコさんが、綾波の体の事で検査があるって」

「じゃあ久しぶりにお姉さんと飲みに行きましょう」

「え、僕まだ未成年ですよ？」

ミサトさんは僕の返事なんて気にしないで強引に腕を引っ張って歩きだしてしまった。

ミサトさんに連れてこられたのは、第三新東京市の一角にある喫茶店だった。

てつきり居酒屋やバーにでも行くと思ってた僕にとっては意外だった。

「リツコが上手くやってくれたみたいね。シンジ君、ここには盗聴器とか仕掛けていないから安心して」

この喫茶店は加持さんがスパイ活動をしていた時にも連絡場所として使っていた特別なお店のようだ。

父さんにどうしても聞かれたくない話をするために僕をここに呼んだらしい。

どんな話なんだろう。

ミサトさんが取り出したのはGショックの腕時計だった。

確かラバースコレクションだったかな。その男物の時計みたいだ。

……ってことは女物の時計の方は？

「ごめんなさい、ミサトさんの事はお姉さんとしかみれないんです！」

僕はミサトさんに手を合わせて謝っていた。

「シンちゃん、違うのよ！これを見て」

ミサトさんは僕の前に便箋のようなものを取り出した。
そこには見覚えがあるような気がする下手な日本語の文字が踊っていた。

シンジ、誕生日おめでとう。

もう住む世界が違うからシンジとは会えないけど、
アンタのこと嫌いじゃなかったよ。元気でね、さようなら。

u k a

A
S

アスカ……？

「ご注文はお決まりですか？」

「じゃあ、レインボーマウンテンを2つ……」

レインボー……

アスカ……

オーバー・ザ・レインボー……

惣流・アスカ・ラングレー！

「うっ、頭が痛い」

僕は強烈な頭痛に襲われて、倒れこんでしまった。

「ちょっと、シンジ君、大丈夫！？……もしもしリツコ、シンジ君が！」

紅茶色の髪ときれいな青い瞳を持った女の子。
とっても唯我独尊で暴力的に見えるけど……。

でも、実はとても甘えん坊でかわいいんだ……。

僕が後ろ向きで内罰的になって暗くなっていると、明るく照らしてくれる太陽のような……。

だから僕も月のようにきれいに輝くようになったんだ、側に居たい……。
守ってあげたい、アスカ……。

僕が気がつくところにはネルフのリツコさんの研究室のベッドだった。
僕はアスカにもう一度会いたい……。

じっとして居るだけでその気持ちがあふれ出しそうだ。

アスカと一緒に居たから僕はどんな困難も乗り越えてこれたんだ。

僕は次期司令の職なんて要らない。

ネルフの仕事を失うなんて怖くないさ。

あの時、アスカと別れることになるなんて、僕は知らないで一人で
浮かれていたんだ。

アスカはそんな僕を見て何て思っていたんだろうね。

もう一度アスカに会ったら、今度は気持ちが通じるかな。

アスカの声を聞きたいな……。

アスカ……。

僕はアスカに会いに行くよ……。

僕が目覚めたことにミサトさんとリツコさんが気がついたよう
だ。

「ミサトさん……あの……アスカのことなんですけど」

「みなまで言うな。あたしとリツコは、シンジ君の味方よ」

「早速作戦を考えないとね」

ミサトさんとリツコさんは楽しそうな笑顔を浮かべた。

第三話 シンジ、死す

ネルフのリツコさんの研究室。

ここで僕とミサトさんとリツコさんはどうやって父さんの目をこまかして僕をドイツに行かせるかと言う作戦を練っていた。

「多分、シンジ君が生きている限り、司令は地の果てでも追跡しようとするわね」

ミサトさんの言葉に、リツコさんは何か閃いたようだ。

「そうよ、シンジ君に死んでもらえばいいのよ」

そう言っ僕を見つめるリツコさんの目が怪しく光っていた。

僕は蛇ににらまれた蛙のように、何もすることができなかった。

そしてリツコさんは注射器のようなものを取り出した。

僕にはリツコさんが死神に見えた。

動けない僕に近づいて、僕の服の腕をまくりあげる。

「大丈夫、ちょっとチクリとするだけよ」

ああ、僕はなんてバカなんだろう。

リツコさんたちにだまされて、アスカと会える事を夢見てしまっなんて……。

あれ？腕に注射の針が刺さるような痛みがただけで、なんともない。

閉じていた目を開けると、笑顔のリツコさんとミサトさんの姿があった。

「シンジ君は注射が苦手なのかしら？ 凄い怖がりようね」

「男の子でしょう、しっかりしなさいよ」

ミサトさんも僕が注射針を刺される前には青い顔をしていたのに、凄く開き直り方だ。

リッコさんは注射器のような道具を大事そうにケースの中にしまつて一息つくくと、僕とミサトさんの方に向き直つて話を続けた。

「今、シンジ君の細胞を採取したわ」

「それと僕が死ぬって事と何の関係があるんですか？」

リッコさんが指を鳴らすと、頭上からホワイトボードが降りて来た。多分天井に収納されていたんだと思う。

まるで四次元空間でもあるみたいだ。

リッコさんはホワイトボード用のマジックで図のようなものを書いている。

なんか失踪とか事故死とか物騒な単語が書いてあるんですけど！？ いつの間にかリッコさんの頭には黒いひし形の帽子がかぶさっていた。

手には棒のようなものが握られている。

僕とミサトさんは教室の生徒のように椅子に腰かけてリッコさんが説明を始めるのを待っていた。

リッコさんがSTEP・1と書かれた場所を棒で差して説明が始まった。

「まず、シンジ君の身体の細胞の一部を使って別の肉体を培養するの」

リッコさんはそう言った後STEP・2と書かれた場所を指し示した。

「それを事故に巻き込まれたシンジ君の遺体として公表して周りの人間を騙すってわけよ」

ミサトさんが座ったままさつと右手をあげる。

リツコさんが棒を振ってミサトさんを指すと、ミサトさんは立ち上がって発言を始めた。

「そんなに上手くいくかしら？ネルフのクローン技術は優秀だってことはレイの事もあるからわかるけどさ」

「大丈夫、多分検死は私の息のかかったスタッフが行うし、遺伝子鑑定をしても元は同じシンジ君なんだから不自然な点は無いわ」

リツコさんはSTEP・2と書かれた場所のカテゴリにあるイラストを指し示した。

目がつり上がって、鋭い牙をむき出しにした鬼のような女の人がハンドルを握って車を運転するコミカルな絵が描かれている。

「シンジ君はスピード狂のドライバーの暴走車にひかれて死んでしまうの。だから死体の損傷は激しいってわけ」

「ねえ、リツコ。まさかその鬼みたいなスピード狂の女ってあたしをイメージしているんじゃないでしょうね」

「イメージも何も、スピード狂のドライバーの役はミサトにやってもらうわよ？ミサトの腕ならネルフを巻くのも簡単でしょう？」

「簡単ってリツコ、あたしは人を思いっきり引いた事もないし実際にひき逃げ犯の検挙率が高いのよ？」

「他の方法じゃ偽装は難しいのよ。行方不明ではなく、死んだように見せないといけないから」

僕が口を挟めないところでドンドンと計画が進んでしまっているよ

うだ。

でも、僕はやっぱりどうしてもアスカにまた会いたい。

父さんや母さん、綾波を悲しませてしまうかもしれないけどアスカの側に居たいんだ。

「でもシンジ君、残念ながらシンジ君と同じだけの質量の肉体を培養させるには後2年ぐらかかるわ」

「2年と言ったら、シンジ君が18歳になるころよね？碇司令の法的保護が解けるんだから死ぬ必要はないんじゃないの？」

「ネルフは今でも超法規的組織なのよ。それに、碇司令の意志の強さは尋常ではないわ」

「そうね……ユイ博士を取り戻すことも執念で貫き通した人だものね……」

僕は改めて父さんの存在に恐怖した。

父さんにこの事がばれたら、もし本当に死んでもずっと疑い続けるだろう。

二度とネルフから逃げられなくなる事は間違いない。

父さんが僕と綾波を幸せにする方法を間違っていることに気づいてくれればいいのに。

「シンジ君、あなたにとっては辛い事だけど2年間は今の生活を送ってじつと耐えてちょうだい」

「司令はあたしとシンジ君が同居を続けることにも顔をしかめているからね……そのうちレイと二人暮らしさせられるかもしれないわ」

僕はミサトさんと一緒に自分たちの家であるコンフォート17へ帰った。

家には一足先に綾波が待っていた。

相変わらず表情に乏しいけど、僕には寂しそうに見えた。

だんだんと『二人目』の綾波に近づいていくのかもしれない。

「碇君、お腹空いた」

僕はミサトさんと綾波が待つ中で夕食を作る。

僕はアスカの記憶を取り戻す前から、不思議とニンニクを使った料理はほとんどつくらなかった。

前の綾波とそっくりになってしまったらアスカのところに行くのを思いとどまってしまうかもしれない怖さからなのだろうか。

自分でもよくわからなかった。

『三人目』の綾波も肉料理はあんまり好きになれないみたいだった。でも父さんは僕に綾波には健康な子供を産んで欲しいから、肉も食べるようにさせるときつくいい聞かされた。

僕も綾波は肉を食べた方がいいとは一般論としては思っただけど……

……感情では否定していた。

……最低だな、僕って。

夕食では綾波も少しは話すんだけど、あの騒がしかったアスカに比べると何か物足りない。

ミサトさんと言い争うこともないし、ミサトさんも保護者的にはいい子で助かっている。と口では言っているんだけど……。

ミサトさんが綾波をからかうために鼻から牛乳を吹き出せ、なんて無茶苦茶な事を言った事があった。

「命令なら、そうします」

綾波はそう言っただけで牛乳を鼻から噴き出したんだ。それを一生懸命やり続けた。

この事件があつてからミサトさんも綾波をからかえなくなった。

僕は別に綾波が嫌いなわけじゃないけど……僕の事を小突いたりバカにしたり余計なおせっかいを焼いたりして、輝かせてくれるのは

アスカなんだ。

僕と綾波は同じ”静”のタイプだとは思っただけど……僕は綾波を強引に引っ張るとか、そう言う事はできそうにないよ。

寝る時間になつて自分の部屋に戻ると、僕は自分の部屋に隠すようにしまつていたアスカの制服を取り出した。

アスカは日本を出ていく時、洋服とか荷物のほとんどを置いて行つた。

そして今はその部屋は綾波が使っているけど、こっそりと引越しの時アスカの私物をいくらか自分の部屋に持って来たんだ。

僕はアスカの制服の匂いを嗅いだ。

でもやっぱり防虫剤の匂いしかしてこなかった。

アスカの制服を強く抱きしめた。

温もりが伝わってくるはずもない。

アスカのくれたバースデーカードに口づけする。

無機質な紙の味しかなかった。

アスカの香りがするもの、アスカの温もりが感じられる何か欲しい……僕はそんな自分を変態なんだと自嘲しながら眠りについた。

それから半年ぐらい経った頃。

僕はネルフの廊下で、とんでもない事を聞いてしまったんだ。

「レイ、まだシンジのやつは告白して来ないのか」

「はい」

「お前は悪くない。やはり葛城君の存在が邪魔なのか」

「そんな事は……」

「婚約してしまえば、シンジはここを離れられなくなる……いいな、命令だ」

「わかりました」

これはとんでもないことになった。綾波は多分父さんの命令には逆らえない。

僕が綾波とこれ以上関係を深めたら……多分アスカのところには行けなくなる。

案の定、父さんはミサトさんの階級を引き上げて多忙な職務を押しつけて、ミサトさんが保護者の役割を果たすことができないとしたうえで二人暮らしをするように僕に勧めて来た。

僕は断りることができなかった。

そして僕と綾波はミサトさんの部屋とは別のところで二人だけの新しい生活を始めることになった。

僕も健全な高校生の男だからそういう欲望も人並みにはあった。

でも、アスカの事を想ってぐつと耐える日々が続いて行っただ。

綾波の態度は前とほとんど変わっていない。

でもお風呂上がり色っぽい姿で部屋をウロウロされた時なんかは

……とても辛い。

僕と綾波の関係はこのまま変わらずに済むと思っていた。

僕が我慢さえすればそれでいい。

……だけど、いらだった父さんは次の手を打ったんだ。

今まで料理をほとんど作らなかった綾波が急に料理を作るようになった。

僕は何の疑いも無くそれを口にした。

数カ月経つと、僕は少し違和感を感じるようになった。

綾波を見ると、なぜかキスしたい抱きしめたいという気持ちが少し芽生えるようになったんだ。

そんな日が何日も続いて、とある日の夜に綾波はパジャマ姿で僕の部屋に突然やって来た。

僕は綾波を押し倒してしまったんだ……。

でも、それから先は父さんの思惑通りには行かなかったんだ。
僕は綾波を押し倒して……綾波の胸にすがって泣きじゃくった。
綾波はそんな僕の頭を優しくなでてくれていた。

「碇君は私にはお母さんの温もりを求めているってことはわかって
いる。私も碇君の事を異性の男性としては意識できない」

「ごめん……綾波」

だけど綾波も父さんの命令に逆らう事はできず、僕と綾波の同居生
活はそのまま続行された。

リッコさんの検査で分かったけど、綾波の作った食事には精力剤が
入っていたみたいだ。

綾波は僕の病気を治療するための薬だと父さんにだまされていたら
しい。

それから料理に薬を混ぜられる事は無くなった。

僕はその後の生活も希望の日が来るのを待ちながら送っていた。

そして、リッコさんの主導による僕のネルフ脱走計画が幕を開けた。
リッコさんはまず父さんに僕を新生ネルフドイツ支部に視察に行か
せることを提案し、様々な理由をつけてなんとか同意させることに
成功した。

僕のドイツ支部視察のメンバーにはリッコとミサトの息のかかった
人たちが選ばれて、マヤとミサトも同行メンバーに加わることがで
きた。

父さんは綾波も同行させるように要請してきた。

こればかりはミサトさんたちも受け入れるしかなかったみたい。

僕も綾波に計画の内容を話してしまうわけにもいかず、心が痛んだ。
ミサトさんとマヤさんも綾波の前では僕と混み入った話ができない
し。

僕らが専用機でネルフドイツ支部に着くと、支部長の人をはじめ多くの人たちが僕らを迎えてくれた。

でもこの中にアスカの事を蹴ったり殴ったりしていじめた人がいると思うと、僕は顔をひきつらせた笑顔しか作ることができなかった。握手された手も、汚いものに触れられたかのような気がして洗い流したかった。

ドイツ支部の視察の日程には基地の見学のほかに市内観光も含まれているみたいだった。

僕は純粹にアスカの故郷であるドイツと言う国に興味を持っていた。最終日に予定されている脱走計画を考えると楽しんでいる場合では無いとも思っただけ。

「シンジ君。あなたは死亡報道が出た後、別の名前のドイツ人として生きてもらうことになるわ。名前を考えておいてね」

綾波が少し離れたすきにミサトさんがそつと耳打ちしてきた。

僕はその言葉に頷き返した。

計画の事は日本を出発する前にリツコさんから説明を受けていた。

僕は事故に遭ったと偽装した後、すぐに栗色の毛をしたカツラと目の色を青色にするためのカラーコンタクトを使って日系ドイツ人に変装しなければならない。

ミサトさんを講師にしてドイツ語もみっちり勉強してきたから多分大丈夫だと思う。

僕はドイツを視察の期間内にゆっくりと巡ってから名前を考えることに決めた。

「シンジ君。名前は決まった？」

「苗字は決めたんですけど……名前がすっかりなくて」

「そう。……さっき会った男の人の名前がハンスだったわね、確かハンスで良い？」

僕はミサトさんにドイツの博物館を巡って、自分の境遇に似ていると思った偉人の名前を名乗ろうとしている事を話した。

ミサトさんは驚いた表情だったけど、理由を聞いて納得したみたいだ。

「確かに、シンジ君は有望視されている次期司令の座を捨てるわけだからピッタリかもね。いいわ、リツコに頼んで新しいIDを作ってあげる」

そして、視察の日程も無事過ぎて行き……ついに運命の日がやって来た。

僕は遠巻きに僕が逃亡しないように目を光らせている見張りたちの目を盗んで、指定されたポイントで自転車に乗って思い切りこいだ。僕の姿を見失った見張りがあわてて僕の後を追いかけて……発見した時は暴走車に引かれた僕の死体があると言っシナリオだった。

実際には僕は側に止めてあるネルフの大型トレーラーにマヤさんたちによって匿ってもらっていた。

トレーラーの中には僕の変装道具も隠されていた。

事故で大騒ぎになっていたけど、マヤさんの運転する大型トレーラーは上手く冷凍車としてごまかすことが出来たみたいだった。

僕を乗せたトレーラーは疑われること無くヴィルヘルムスハーフェンの駅までたどり着いた。

アスカがこの街の大衆食堂で働いている事を突きとめてくれたリツコさんには感謝しきれない。

駅にはミサトさんも到着していた。
どうやら上手く追跡を逃れたみたいだ。

「あたしたちはこれ以上手助けできないけど、頑張ってね……シンジ君、いえ、ハンス・シュトイベン君」

ミサトさんに見送られて僕はこれからドイツ人の学生、ハンス・シュトイベンとして生きていくことになった。

僕はアスカに会うために、彼女が働いている大衆食堂へと向かった……。

その頃、僕は知らなかったけど次期ネルフ本部司令と言われた僕が交通事故によって死んだ事は僕の予想を超えて大きなニュースとしてドイツのTVで放送されていた。

もちろん、その事はアスカの耳にも届いていたんだ……。

第四話 アスカとハンスの出会い

アスカとシンジが離れ離れになってから既に4年がたっていた。ドイツのヴィルヘルムスハーフェンにある大衆食堂『海猫亭』。その店は最近若くてかわいい看板娘がいると評判になっていた。北条アスカ、18歳。

彼女はすでに大学を卒業していたし、日本に居た時のように学校に通おうとはしなかった。

アスカは店主であるマリアに料理や掃除、接客の仕方などを教え込まれていた。

アスカは将来この店を継ごうと考えていたからだ。

アタシが食堂の看板娘として忙しく働いていたとある日の事。

この店にネルフのドイツ支部に出入りしている業者の社員が客としてやって来た。

最近ネルフで大きな歓迎式典があるらしくて、歓迎会に使われるような品物の注文が多いとか話していた。

「なんでも、ドイツ支部を視察に来るのが日本のネルフ本部の司令の息子らしい」

「ドイツの支部長はゴマをする気にいるのか」

日本から来る司令の息子ってもしかして……シンジ？

アタシは久しぶりにシンジの笑顔を思い浮かべて胸が高鳴った。

ネルフを出ていく時、シンジの写真は持って来なかった。

シンジの温もりを感じされるのは頭に付けたこのリボンだけ。

シンジの笑顔はアタシの思い出の中にしか存在しない。

ああ…… もう一度でいいからシンジに会いたいよ。

ううん、直接会えなくても遠くから見ただけでもいい。

しかし、シンジはネルフのVIPだ。たくさんのガードがついているに違いない。

ネルフを脱走したアタシが近づけるはずもない。

「アスカ、明日コロナビアホテルに出前に行ってくれないかい？」

アタシは閉店後の夕食時にウィナーソーセージをかじりながらママの話を聞いていた。

アタシは日本で運転免許証を持って居なかったから、ドイツの学校に通って運転免許証を取った。

ドイツの運転免許証は生涯更新しないで有効でEU各国で使えるみたい。

日本に比べて大違いよね。

ちょっと話がずれてしまったけど、アタシは出前とかをママの代わりにするために運転免許を取ったの。

今年で55歳になるママに配達とかさせたくないしね。

「何でもね、ホテルで行われるパーティに出席する人がドイツの料理に飽きたらしくてね、和風の料理を希望しているみたいなのさ」

「それってもしかして、ネルフの？」

「そうみたいだね」

アタシはネルフのドイツ支部の人間と顔を合わせるのが嫌だった。さすがに今は無関係だけど、アタシを苛めたやつらの顔なんか見たくない。

でも、もし会ってシンジと一言でも話せたら何を言えればいいんだろう……。

シンジはきっとファーストのやつと幸せになっているはずよね。

アタシはもうネルフとは縁を切るって決めたんだ。
シンジを忘れるって決めたんだ。
でも、もう一度だけシンジの笑顔を見たい。
シンジにアスカって呼んでもらいたい。
アタシって諦めの悪い女なのね……。

次の日、アタシは料理を持ってネルフのパーティが催されるコロ
ンビアホテルまで来ていた。

このホテルのどこかにシンジがいる……そう考えただけでアタシは
シンジと同じ空気を吸っているのかと胸が高鳴った。

ホテルは司令の息子が来ていると言うことで警備は厳しかった。

アタシは料理をホテルの厨房に届けた後も、未練がましくホテルに
残っていた。

従業員によれば先ほどシンジたちがこの廊下を通ったと言う。

アタシは胸いっぱいシンジの残り香を吸い込んだ。

シンジ……シンジはどのくらい男の人らしく成長しているんだろう
か。

やっぱり4年間のうちに背も伸びて、髭も生やすようになって、男
の匂いも漂わせるようになったのかな。

……ってアタシ何を考えてるのっ！

シンジ宛てにこっそりと届けたプレゼント、シンジはあの時計着け
てくれているのかな……。

ファーストと付き合っているなら捨てられてしまっているかも……。

アタシって人の恋に水を差すようなことをして、嫌な女ね。

アタシはシンジと同じ建物と言う近くの場所に居る……。

でもシンジの心はもうファーストの下にあるんだよね……。

やっぱり会わない方がいいか。

アタシは警備員に不審者と怪しまれないうちにホテルを出た。

配達からの帰り道、アタシはほおをなでる潮風を感じていた。
今夜の海は荒れそうね。

そういえばママも旦那さんと娘さんを海難事故で失ったって言うていたっけ。

アタシとママが出会ったのも潮の香りがする港だったっけ。

この4年間アタシはとっても心安らぐ場所に居る事が出来た。
早起きすることは苦手だったけど、ママに教えてもらった事。

人の心の温かさ。

お客さんと交わす笑顔。

お互いに信頼すると言う事。

ネルフに居た時は他人を出し抜こうとして、周りもそのような競争社会に生きる人が多かったけど、ここでは競争など存在しない。

アタシはこの食堂を離れたくない。

ネルフに戻る可能性を捨ててもこの街に居たい。

暖かい人たちがいるこの街で暮らしたいの。

シンジ……。

アタシはシンジの事を忘れるって決めたのに何でシンジの事ばかり考えてしまうんだろう。

シンジに手紙を出すこともできる。

シンジは優しいからファーストと付き合っけていても返事をくれるだろう。

でも、それはシンジにとって迷惑でしかない。

アタシは部屋にあるシンジ宛ての出せない何通ものエアメールを思い出してため息をついた。

アタシが食堂の見える場所まで戻ると、営業時間のはずなのに食堂にお客さんの姿が無かった。

「ただいまー。一体どうしたの？」

アタシが店の中に入ると、常連さんの一人のサブさんが血相を変えていた。

「北条さんが突然倒れてしまったんだよ！」

「ママが？」

アタシはサブさんと一緒にママが運び込まれた病院へと向かった。ママは現在手術中だと言う。手術室の赤いランプが点灯している。アタシは手術が終わるのを部屋の前長い椅子に腰かけてじっと待っていた。

アタシは赤い色が好きだけど、この赤いランプは好きじゃない。シンジに会いたいと思ったアタシに対する罰なの？

シンジがくれたお気に入りの赤いリボンをさすりながらアタシは手術の成功を祈っていた。

サブさんが帰った後もアタシは待ち続けた。

手術中の赤いランプが消えて、中から医者先生が出て来た。

先生はアタシを見つけると近づいてきた。

「北条マリアさんの家族はあなたですか？」

「はい、アタシです」

「では、病状について説明するのでこちらへどうぞ」

アタシは先生の後に続いて部屋に入った。

「今回の手術は成功に終わりました。胃の一部分を切除することに

なりましたが、病巣は全て摘出されたでしょう」

先生の後ろでは看護婦さんがレントゲン写真のようなものを並べている。

説明の内容から察しがついた。

「もしかして、病気の原因はガンだったのですか？」

「ええ、胃ガンでした。なので……他の場所に転移していた場合は」
「転移した場合は？」

アタシはその先の言葉を聞きたくなかった。

「もって数年の命となるでしょう」

そんな……やっとアタシにも本当の家族が出来たと思ったのに……。このままママと一緒に小さな幸せを感じられる毎日が送れると思ったのに……。

アタシはまた一人ぼっちになってしまふの？

アタシは頭の中が真っ白になって、気がつくまで病室で寝ているママの横に座っていた。

ママは麻酔が効いているのか穏やかに胸を上下させている。

アタシはもしかして幸せになれない運命なのかもしれない。

アタシの目からは涙があふれ出していた。

「アス力……」

その言葉がアタシを現実へと引き戻してくれた。

「ママ！」

ママはゆっくりと目を開けて微笑みかけてくれた。

「そんな顔をしてたら、せっかくの美人が台無しじゃない」

「ママと一緒に居られなくなるかもしれないから……」

「そうかい、やっぱりあたしや重い病気にかかっていたんだね」

アタシはしゃっくりあげながら頷いた。

「そんな悲しい顔をしているアスカを見るとあの日を思い出すね」

「あの日って？」

「あたしとアスカが出会った日だよ」

ママはアタシに向かって手を差し伸べようとした。アタシの方からママの手を握った。

「あの時のアスカは全てに絶望して海に身を投げようとしてたね。あたしや自分の娘と同じように海で若い子が命を散らすのを見たくなかったんだよ」

「……ごめんなさい」

「あたしはアスカに自分の娘を重ねて夢まで押しつけてしまったみたいで悪かったね」

「うつん、アタシは自分であの食堂を手伝おうと思ったの」

「そう言ってくれると嬉しいよ。あの食堂はアスカに任せる、もし他の仕事をしたいのなら畳んでしまってもいい」

「ママ……」

アタシはママの顔を見て、揺らいでいた決心を固めることにした。

「アタシ、あの食堂を続けるよ。ママみたいにまだ上手くできない

けど、ママが元気になって戻ってくるのを待っている」

「アスカにはあたしの味のほとんどを伝えたつもりさね……ありがとう」

ママはそう言っただけで安心した顔で眠りについた。

アタシはママと約束をした以上、強く生きなくちゃならない。

次の日の早朝、アタシは食堂を開ける準備のために、仕入れた商品の点検をしていた。

料理の他にこの食堂では新聞や日用品と言った雑貨も取り扱っている。

アタシは新聞を運んでいるときに、信じられない記事を見てしまった。

『ネルフ次期司令、交通事故死』

日本語新聞には一面でセンセーショナルな記事として書きたてられていた。

死亡者の顔写真は……18歳に成長したシンジの凛々しい顔写真だった。

アタシは待ち焦がれていたシンジとこんな形で再会を果たすことになるなんて思ってもみなかった。

何で？ シンジはファーストと幸せな人生をこれから歩むはずじゃなかったの？

アタシはシンジの事を想って思いっきり泣き叫びたかった。

でも、アタシはママと食堂を一生懸命やっていくと約束した。

泣いてばかりはいられないんだ……。

でも、今日一日だけは泣いていいよね？

アタシは臨時休業の札をかけて、一日中泣き続けた。

一生分の涙を流すんじゃないかと思うくらい流し続けた。

次の日から、アタシは一生懸命仕事に集中した。

仕事に集中しないとシンジの事を考えて泣いてしまうから。

営業時間中はお客さん相手に笑顔を振りまく。

でも、閉店時間になってお客さんが居なくなると一人残ったアタシは寂しくて泣きそうになってしまう。

そんな仕事に打ち込む日々が続く中、アタシは最近お客さんの中に不思議な男性客がいる事に気がついた。

見た目はドイツ人の学生に見えるんだけど、料理を注文するとき以外はジツとアタシの方を見ている気がする。

アタシに下心丸出しで近づいて来る男共も居るんだけど、その学生からはいやらしさを感じない。

学生なのに一人で来るのも変だし、だいたいこの近くには学校が無い。

良心的な価格でやっているから安さに釣られてきているのかもしれないけどね。

でも、やっぱり変だ。

注文を待っている時も本を読んだり窓の外を眺めるでもない。

アタシと目が合うとわざとらしくそらしたりするし。

その変な学生は、閉店時間が過ぎて一人になったアタシにおずおずと話しかけて来た。

「あの……悲しいのに笑顔をしているなんて辛くないですか？」

「余計なお世話よ！」

アタシが思いつき怒鳴るとその学生は驚いて逃げて行った。

凶星を突かれて心臓をわしづかみにされた気分だった……突然何て事を言い出すのよ、もう！

その学生は性懲りも無く次の日も店にやって来た。

アタシは愛想笑いもそこそこに軽くあしらってやった。

それなのにまた、その学生は店が終わった後に話しかけて来た。

「あの、僕をこの店で働かせてくれませんか？」

「はあっ！？いきなり何言ってるのよ！」

「……ごめんなさい」

「何で働きたいの？大した給料も出せないわよ」

「……ごめんなさい」

「だ・か・ら、理由を聞いているの！」

「あなたを側で支えたいからです」

こいつ、謝ってばかりだと思ったらいきなり何を言い出すのよ。

「やっぱり、アンタを雇う事はできないわ」

「……どうしてですか？」

「アンタを見てるとね、イライラするのよ！」

アタシはその日もその学生を追散らした。

でも、次の日もその学生は店にやってきた。

アタシは周りの客が驚くほど乱暴に料理を運ぶ。

いっそ下剤でも盛ってやろうか。

そうすれば二度と来なくなるに違いない。

でも、アタシにはそれとは正反対の気持ちも芽生えて帰ろうとするその学生を自分から呼び止めてしまった。

「アンタ、閉店後に話があるから残ってなさい！」

そう言われたそいつは借りて来た猫のように大人しく店の中で待つて居たわ。

閉店後、二人つきりになったそいつとアタシは厨房の中で向かいあった。

「アンタ、料理はできるの？」

「あまり上手くないですけど、自炊をしていましたから……」

「じゃあ、ここにある材料を使っていいから何か料理を作って」

そいつは食材を選ぶと、ハンバーグを作り出した。

自炊しているのにハンバーグを作るなんて、普通一人暮らしの学生ならもつと簡単な料理で済ますだろうに、変わったやつね。

アタシの頭の片隅にアタシのわがままに付き合ってハンバーグをよく作ってくれたシンジの姿が思い浮かんだ。

「できました」

そいつの作ったハンバーグを一口食べると、懐かしいあの味を感じた気がした。

……まさか、こいつはシンジ？ いや瞳の色は青いし、髪の色は茶色いし、身長もアタシより大きくてドイツ人に見える。

でも、アタシはこのおいしいハンバーグを作ったこいつの『腕』を見ると、笑いがこみ上げて来て止まらなくなった。

アタシは出来るだけ穏やかな笑顔になるように作り笑いをしながら話しかける。

「合格よ。アンタ、明日からこの店で働きなさい。出前が出来なくて困っていたのよ」

「ありがとうございます」

オドオドしていたそいつはやっと安心したような笑顔になった。

「アンタ……名前は？」

「ハンス・シュトイベン……です」

「じゃあこれからアタシはアンタをシュトイベンって呼ぶわ。アタシはアタシをアスカさんって呼んでいいから。雇い主なんだからね、ちゃんと敬称をつけるのよ」

「よろしくお願いします、アスカ……さん」

こいつは一瞬アタシの名前を呼び捨てにしようとしたけど、アタシは広い心で許してあげる事にした。

だってこの時は嬉しくて仕方なかったんですもの。

第五話 シンジへの嫉妬

僕は碇シンジ。

だけど今はカラーコンタクトで目を青色に変え、茶色い毛のカツラを被ってドイツ人の青年「ハンス・シュトイベン」という戸籍を持った人になりきっている。

僕の正体が碇シンジだと言う事がばれると、ネルフへ連れ戻されてしまうからだ。

ネルフから離れてドイツで食堂の店主兼看板娘として働いているアスカを追って日本からやって来たのにまた引き離されたくは無い。

僕はアスカにでさえ自分がシンジだと名乗れないのは辛かったけど、それでもアスカの側に居るためには仕方がなかった。

アスカは僕の事を学生だと勝手に思い込んでいたみたいだ。

僕が学生では無い事を知ると……アスカは住み込みで食堂で働かないかと勧めて来たんだ。

その提案に僕は驚いた。

今は食堂の店主のおばさんが入院しているから二人きりで暮らすってことになるんだけど……。

アスカはその事をわかってるのかな？

もしかして、僕にそんな度胸など無いとでも思われているのかな……。

「アンタは信用できるとアタシが思ったからよ」

僕はアスカに会って2週間ほどしか経っていないけどアスカに信頼してもらえたらしい。

こうして雇ってもらった次の日から僕は住み込みで食堂『海猫亭』で働かせてもらう事になった。

「こら、いつまで寝ているの、起きなさい！」

「あ、ごめん、アスカ……さん」

危ない危ない。またアスカを呼び捨てにしそうになっちゃったよ。心の中ではアスカって呼び捨てにしているんだけど……アスカと呼び捨てで言い合えるのは『シンジ』だけなんだよね……多分。

それにしても、アスカに起こされるなんて思ってもみなかったよ。ミサトさんと居たころは僕がアスカを起こしていたのに。

アスカは僕を連れて市場へとやって来た。今日の食材を仕入れるためだ。

お店の常連客でもある漁師のサブさんがアスカに話しかけて来た。

「やあ、アスカちゃん。今日は彼氏連れかい？」

「やだなあ、サブさん。コイツは新しく雇ったバイトよ」

アスカとサブさんは日本語で話している。

僕は日本人の碇シンジじゃなくてドイツ人のハンス・シュトイベンとして振る舞うのだから、日本語がわからない振りをする必要はない。

「しかし、今までどんな男の子の誘いも断って来たアスカちゃんがね……」

「あんまりからかわないでくださいよ」

そう言っアスカは頭にある赤いリボンに触る。

僕がシンジだったとき、アスカが日本を離れる前日にプレゼントしたものだ。

アスカはまだシンジの事を大切に思ってくれているんだね……。

その後青果店や雑貨店で仕入れをして店に戻った。

店に戻ると今度はアスカが僕に食堂のメニューの料理を教える。

僕は配達だけではなく、調理も手伝う事になりそうだ。

アスカから料理を教わるなんて、やっぱり不思議な気分だ。

僕は筋がいいとアスカにお誉めの言葉を頂いた。

こうして、お揃いのエプロンで料理をしていると……なんか新婚さんみたいだね。

でも、そう思っても僕は言う事を許されなかった。

だって従業員にすぎないからね。

しばらくすると僕も店での仕事に慣れて来た。

そして、アスカの代わりにマリアおばさんのお見舞いに行く事も多くなった。

僕は気になっている事をおばさんに聞くことにしたんだ。

「あの、マリアさん。マリアさんが退院したら僕はどうなるんでしょうか？」

マリアさんは驚いた顔をしてから、ニッコリと僕に微笑みかけてくれた。

「ハンス君さえ良ければ、ずっとお店に居て欲しいと思っているわ」

「ありがとうございます」

「アスカはその事を言っただけだったのかしら？」

「いえ、聞かなかった僕も悪かったですから」

マリアさんは僕の言葉に嬉しそうに満足げに頷いた。

でも、目を細めて悲しそうな顔をして僕に話しかけて来たんだ。

「あの子は辛い思い出を背負っているからね……側で支えてあげたいんだよ。でも、あたしはもう長い間一緒に居てやれない。それだけが心残りだよ」

「マリアさん……」

「さらにあの子が好きだった子もこの前交通事故で死んでしまったらしいんだよ」

それは……きつと……僕の事だ。

「あの子は今でもその子のくれたリボンを付けているみたいでねえ……不憫で仕方が無いよ」

「そうですね……」

「だから、私の代わりにとは言わないけど……アスカの事を支えてはくれないかね」

僕は伸ばされたマリアさんの手を握りしめて強くうなづいた。

僕は過去に生きたシンジではなく、今に生きるハンスとしてアスカを愛して支えていこうと決意した。

でも、僕は……シンジを裏切ってハンスを愛するアスカを受け入れられるかどうか、まだ不安だった。

それから何日か経って、マリアさんのお見舞いに行ったアスカの様子が何か変だった。

僕の方を見て何かモジモジしているし、視線を合わせようとしても反らしてしまう。

僕はまたマリアさんのお見舞いに行った時に聞いたんだけど……。アスカはやっぱシンジへの思いは捨てられないらしい。

でも、僕を見ているとシンジに似ている気がして気持ちが落ち着かないとか……。

僕を信用して雇ったのもシンジに雰囲気似ているかららしい。

似ていると言っても……本人なんだけどな。

それを聞いて僕は嬉しいのか悲しいのか複雑な気持ちになった。

僕はアスカと一緒に生活して親しくなった気がするけど、アスカがシンジの面影を求めているだけなのかな？

ハンスと言ふ人間を見てはくれないのだろうか？

僕は誰だ？ 今の僕は碇シンジじゃない、ハンス・シュトイベンだ。アスカにいつまでもシンジを見たままでもらっても困る。

さらに、僕は別の意味でも困っていた。

アスカと二人きりでいると我慢するのが辛いんだ。

早くマリアさんが退院して来てくれないかな……。

食堂で働きはじめたころは僕の事を妬む男性客も居た。

だけど徐々に僕とアスカはお似合いの二人だって認めてくれるようになった。

でも、アスカはまだ僕の事を名字のシュトイベンかアンタとしか呼んでくれない。

アスカを呼び捨てにすることも許してはくれなかった。

やっぱりアスカの中にはまだシンジが居るのだろうか。

居ても構わないのだけど、アスカには過去と決別してほしい。

そう思った僕は、アスカの心を試してみる事にした。

「アタシにプレゼント？」

「アスカさんにはお世話になってるので」

僕はアスカに赤いリボンをプレゼントしたんだ。

今アスカの髪を束ねているのはシンジが4年前にあげた古い赤いリボン。

僕はアスカが新しいリボンに付け替えてくれることを願ったんだけ

ど……。

アスカは自分の髪型をツインテールに変えて、新しいリボンと古いリボンの両方を頭に付け続けた。

僕はそれをやはり歓喜と落胆の入り混じった気持ちで見詰めるしかなかった。

僕の中でアスカへの欲望はドンドン強くなっていった。

アスカと手を繋ぎたい、アスカとデートをしたい……その他いろいろ。

僕とアスカは毎日仕入れの時は一緒に居るけど、それはデートじゃない。

市場を回るだけじゃなくて恋人たちのように公園を散歩したりしてみたかった。

僕の正体がシンジだと言えれば、願いがかなう日はぐっと近くなれるかもしれない。

しかし、万が一僕の正体がネルフの関係者にばれたら連れ戻されるのは確実。

ミサトさんたちが協力してくれても再びネルフを脱走する事は無理になるかもしれない。

それに、アスカに危害が及ぶことも……父さんならやりかねない。しばらくまた我慢をする日々が続いた。

でも、僕はある日の夜ついに我慢をすることが出来なくなってしまったんだ。

僕はアスカに近づいて強引に唇を重ねようとした。

だけど、寸でのところで僕はなんとか自分を取り戻してアスカを離れた。

アスカはとても驚いた顔をしていた。

僕はアスカにただ謝ることしかできなかった。

そして、アスカに自分の正体がばれない程度にばかりして自分の胸の内を明かしたんだ。

アスカがドイツに飛ばされてからその後の戦いで綾波が死んで一人

ぼっちになっちゃった事。

それから記憶を失って綾波と同居していた事。

父さんが薬を使ってまで強引に僕と綾波をくっつけようとした事。

僕が苦しむアスカの夢を見た事。

もちろん綾波とかアスカって具体的な名前を言わないで他の人の話だと言う事にして話した。

アスカは僕と綾波が強引にくっつけられそうになった話を真剣に聞いてくれて、怒ってくれたんだ。

そして僕が強引に迫った事も許してくれた。

それでも、その後はしばらく僕の事をちょっと警戒しているようには見えたんだけどね。

でも、僕がアスカの傍に来てから一年が経とうとしたころ、僕はアスカがネルフの制服を着ている人と話す所を見てしまった。

ついにネルフの追跡の魔の手が伸びてきてしまったのか。

今まで見つからなかったのが幸運だったのかもしれない。

アスカに危険が及ぶ前にここから離れよう。

そう決めた僕はその日の夜にアスカに切り出すことにした。

「ここを辞める……なんで？」

僕がここを立ち去ることを話すと、アスカは慌てて泣き出しそうな表情になった。

「やっぱり、アタシがアンタを名前で呼んであげなかったから？」

「いえ、アスカさんがシンジ……さん以外の人を名前で呼ぶのに抵抗があるのは知っています。僕がここを離れなければならないのは別の理由からなんです」

僕はさすがにネルフから追いかけている事は言えなかったけど、逃亡中の身である事は話した。

「じゃあ……5年。5年経ったらここに帰ってきてくれる？ 5年経ってからならほとぼりも覚めていると思うし、アタシもシンジの事を落着いて考えられるようになっていいると思う」
「でも……そんな約束だなんて」

戸惑う僕の前で、アスカはさらにとんでもない事を言い出したんだ。

「じゃあアタシは5年経ったら、アンタと結婚する。いいわね？」

その日の夜、僕はドキドキしてなかなか眠れなかった。
やっとアスカが僕に振り向いてくれたのに、立ち去らなければなら
ないなんて。

いつの間にか僕は眠り込んでしまったみたいだ。
そして、いよいよアスカとの別れの朝がやって来た……。

僕が自分の上に何かが乗っかっているような息苦しさに目を覚ます
と、至近距離にアスカの顔があったんだ。
アスカが僕の上に覆いかぶさって抱きついている。

「おはよう、シンジ」

「おはよう……アスカ……ってえええ！」

アスカは慌てて僕から離れて耳を押さえた。

「もう、いきなり大声を出さないでよ」

「な、なんで僕がシンジだって……？」

おかしい。僕はアスカの前で日本語を話さないようにしたし、カラーコンタクトもカツラもリツコさんの特別製だ。

今まで来たお客さんも僕がドイツ人だと信じて疑わなかった。変装は完璧だったはずだ。

「まったく、バカシンジなんだから。腕を見てみなさいよ、腕を」
「腕って、あ……もしかして」

僕はアスカからもらった腕時計を片時も離さずに巻いていたんだ。

「アスカは最初から僕がシンジだって気がついていたの？」

「ハンバーグを作ってもらった時、腕時計を見てね。後で細かく確認したらアタシのメッセージが刻まれていたの」

時計を外して見てみると、『LAS』とアルファベットが刻まれていた。

「これって……直鎖アルキルベンゼンスルホン酸の事？」

「バカ、ラブラブアスカシンジの略よ！」

アスカがポケットからペアの対となる腕時計を取り出した。それにもLASと書かれている。

ラブラブ……って僕は顔が真っ赤になるのを感じた。

しかし、次の瞬間僕はこれが最悪の事態になるかもしれないと考えた。

「アスカ、僕がここに居るってネルフにばれたら父さんが……！」

「ああ、その事なら心配いらないわよ」

僕が首をかしげていると、アスカは手紙を取り出した。
差出人はミサトさんからだった。

内容を読んでもみると、どうやら綾波が結婚をしたらしいので僕はもうネルフから追いかけられる事は無いようだ。

僕が心から安心してため息をもらしていると、アスカが抱きついて来た。

「さあ、これから結婚の準備で忙しくなるわよ」

「結婚……ってすぐに？」

「そうよ！」アタシ」と”アンタ”で約束したでしょう？　これからは夫婦としてラブラブになるんだから！」

「……うん、僕も我慢できなかったよ！」

その日の午前中は食堂は臨時休業となってしまった。

市場に姿を見せなくて心配して様子を見に来てくれたサブさんは仕方が無いなと大笑いしていた。

余談だけどその一週間後ぐらいにサブさんは姿を消したんだ。

彼も北島サブなんて偽名を使って身を隠していたらしい。

……もしかしてサブさんも逃げるのを止めて大切な人の所に戻ったのかな。

入院中のマリアさんも僕がシンジかもしれないって思っていたらしい。

アスカが僕にプレゼントした腕時計の事を知っていたみたいで、病室で握手した時に感づいたらしい。

本当に僕はバカシンジだったんだね。自分に嫉妬してしまっていたし……。

まあ、これからはアスカと一緒に居られるんだからどうでもいいか！
僕がコンタクトとカツラを取って正体を明かしたらお客さんは驚い

たけど、シンジとしてみんなに受け入れてもらう事ができた。

マリアさんは僕がネルフにアスカを連れて帰るのか心配したらしいけど、僕はここにアスカと残ると聞いたら涙を流して喜んでくれた。僕は完全にネルフと決別するつもりで、北条さんの養子になった。完全に碇シンジと惣流・アスカ・ラングレーはこの世から姿を消したんだ。

マリアさんは僕たちが結婚して、生まれた子供たちを見届けてから幸せそうに息を引き取った。

『海猫亭』は僕とアスカ、そして常連のお客さんに支えられて今日も元気に営業中。

僕たちやお客さんたちの笑顔で溢れている。

第一話 ゲンドウ、襲来

「ここに、シンジとアスカ君が居るのか……」

そう言つて、アスカとシンジの店『海猫亭』の前にゲンドウは立っていた。

シンジがネルフから立ち去つて10年後。

特務機関ネルフは解散し、人工進化研究所と名前を変えて新スタートした。

それとともにゲンドウはトップの座から引退、人類補完計画に加担した負い目を感じたのか退職金を受け取らずに退職した。

新しい組織の全権は綾波レイの結婚した相手に全て託してある。

久しぶりに組織のトップとしての激務から解放されたゲンドウはシンジの事が気になっていた。

ミサトからの報告ではシンジはアスカと結婚し、ドイツで大衆食堂を開いていると言う。

ゲンドウはミサト、リツコらネルフの旧メンバーと共にシンジの元を訪れる事にした。

正直一人で行くのは怖かったからである。

「さあ司令、入りましょう」

「うむ」

ミサトにうながされてゲンドウは入り口のドアを開ける。

今日は天気が悪いせいか客の入りは少なく、突然現れた団体の客は注目を浴びていた。

「いらつしゃいませ……ってミサトさん！」

「ミサト！？……懐かしいわ」

シンジとアスカは嬉しそうにミサトやリツコ、マヤやマコトなどに声をかけていく。

「そうだ、僕たち子供が出来たんですよ」

「おいで、ユキ、ライト」

3歳ぐらいの小さな女の子と2歳ぐらいの男の子が奥から歩いて来る。

ゲンドウは自分の孫達に感激して近づこうとした。

「怖いおじさんが居るから、あっちに行きましょうね」

アスカは2人の子供を抱えてゲンドウから引き離すと奥へ行ってしまった。

わずかに居る客もその光景を不思議そうに見ている。

「シンジ君、お父さんにごあいさつはしないの？」

「どこに父親が居るんですか？　僕はもう北条家の人間なんです」

ミサトが声をかけても、シンジはゲンドウとは反対の方向を見回す仕草をしている。

シンジは強引にレイと結婚させようとしたゲンドウをまだ恨んでいるようだった。

アスカは更迭の辞令自体は仕方が無いと割り切っていたが、シンジから薬を使ってまでレイとの関係を強要した事を聞いて腹を立てていた。

「シンジ、そろそろお父様をお許しになったらどうかしら？」

「アスカがそういうなら……」

アスカは笑顔になってゲンドウたちを席に案内した。

「アスカ君、ありがとう」

「アスカも大人の女性になったのね……」

ゲンドウはアスカに頭を下げ、ミサトはアスカの様子を見て感心している。

アスカは食堂に居る他のお客さんの方を向いて大きな声で宣言した。

「今日はおごりにするから、みんなドンドン食べてね！」

アスカの発言に応えて、食堂の客は歓声を上げた。

「よし、じゃああたしもお言葉に甘えて！」

ミサトはこの機会を逃さないとばかりに店にある高いワインを注文した。

そして、ネルフの人々とその場に居合わせたお客さんの宴は閉店時間を少し越えるまで続き……。

「いやあ、あたしも前よりそんなに飲めなくなったわね」

とマコトに支えられたミサトが満足そうに店を出ていくのに続いて店を出ようとしたゲンドウはアスカに呼び止められた。

「お父様、ちょっとお待ちください」

「なんだね、アスカ君？」

ゲンドウが動きを止めると、シンジは食堂のドアを閉めて出口を塞

ぐように立ちふさがった。

「お食事代は200万ユーロになります」

「200万だと……」

ゲンドウは驚いてサングラスを外して目を見開いた。

「アスカ、それは高すぎるよ。1万ユーロ以上食べたなら割引になるはずだよ」

「あ、そうかじゃあ195万ユーロね」

アスカがレジを打ちなおす。

「私はもう司令の職を辞したのだぞ……そんなに払えるわけがない」

ゲンドウがネルフの司令時代に持っていた限度額無制限のクレジットカードはすでに失効している。

「お客さん、無銭飲食は困りますね。じゃあ警察に付きだしちゃおうか？」

出口に立ってそう言うシンジに対して、ゲンドウは激しく首を振る。

「こ、これは詐欺だ。おごりと言ったではないか！」

「アタシはお父様がおごるって言ったんですのよ。何か問題ある？シンジ」

「問題無い」

この言葉を敵に回すとひどいものだと感じるゲンドウだった。

「じゃあ皿洗いでもして食事代を払ってもらおうかしら。その風体じゃあホール担当は無理だろうしね」

「わ、私は元ネルフ総司令だぞ……」

「ついでに風呂やトイレも掃除してもらおうよ」

「そうね、シンジ」

その後連日ミサトたちは店を訪れ、ゲンドウが解放された時はサングラスは没収され、顎髭は剃られた惨めな姿になっていた。

「逃げられなかった……」

第二話 ユイ、心の向こうに

「さあ、着いたよ。ここがパパとママが出会った国、日本だよ」

シンジは4歳になる息子のライトの手を引いて旅客機から降りた。そしてシンジの妻であるアスカも5歳になる娘のユキの手を引いて後から続いた。

数年振りに日本に帰って来たシンジとアスカだが、湿気の多い日本の夏の空気に思わず嫌な顔になった。

初めて日本の夏の空気を体験するユキとライトも同様に不快感を覚えた様子だ。

「あつーい」

「これがパパが居た頃の日本の空気なんだよ」

シンジはサードインパクトで気候が戻る前の常夏の時の事を思い出したのか、懐かしそうな顔でライトに話しかけた。

しかし、シンジ達が降り立った大阪にある関西国際空港の周辺の風景はドイツのミュンヘン国際空港とそんなに変わりは無かった。

効率化を求めた高層ビルディングが立ち並ぶ光景は、第三新東京市を思い出させるが、シンジとアスカが思っている日本の心とは離れた情景に見えた。

観光客向けに”メイド舞妓”が空港で出迎えをして、ユキとライトを驚かせたが、そのメイド舞妓の立ち振る舞いはやはりコンパニオンに近いもので、シンジとアスカはガッカリした。

「お土産は、帰る時に見るから今は我慢してね」

土産物屋に目を輝かせるユキとライトをなだめながら、シンジとア

スカはタクシーへと乗り込んだ。

目的はゲンドウとユイの住む、京都の家だった。

シンジとアスカがお盆休みにドイツの店を休んで日本へと帰って来たのは、数年振りにゲンドウとユイに会うためだった。

ユイはエヴァ初号機からサルベージされた後も、永遠の命を得る研究に没頭してシンジを怒らせていた。

しかし現在は、ユイは研究所を閉鎖してゲンドウと共に京都で暮らし始めた。

そしてゲンドウを通してユイはシンジと仲直りをしたいと伝えて来たのだ。

初めはユイの事を拒否し続けたシンジだったが、アスカはシンジを粘り強く説得する。

「アタシもママになったから気持ち分かるけど、やっぱり子供と母親の仲が悪いって言うのは辛いものがあるわ」

アスカはそう言って息子のライトを悲しそうな顔で見つめた。

シンジもアスカの言葉に心を動かされ、店を臨時休業させてまで日本にやって来たのだった。

家族を乗せたタクシーはお盆休みの渋滞に巻き込まれながらも、京都市内へと入った。

シンジとアスカは時間が掛かってもすし詰め状態の電車やバスなどに幼い子供達を乗せたくはなかった。

京都は盆地であり、セカンドインパクト発生後からサードインパクトによって日本に秋や冬と言った季節が戻るまでも暑い場所だった。

人々は涼しい地を求めて京都から流出していったので、奇跡的に旧世紀の市街の街並みがそのまま残っていた。

小さい頃に京都の伯父の家に預けられていたシンジにとっては嬉しいものだった。

アスカもユキにこれが日本の伝統的な風景だと堂々と紹介した。
タクシーは混んだ京都市街を走り、大きな日本家屋の家へと到着した。

この家はネルフの司令を退役したゲンドウが買い取って住んだ家である。

シンジ達が訪問するのももちろん初めてだった。

「碇君、久しぶりね」

「綾波！」

家の玄関の前には赤ん坊を抱いたレイと夫らしい人物が立ってシンジ達を出迎えた。

レイの夫は「どうも」と小さくつぶやいてシンジ達に向かって頭を下げた。

「あら、かわいい子じゃないの」

「女の子、今年で1歳になるわ」

アスカに答えたレイの穏やかな微笑みは、すっかり母親の物となっていた。

レイの夫も眼鏡を掛けた真面目で優しそうな男性だったので、シンジはレイが幸せな結婚生活を送っているのだと安心した。

そしてシンジ達はレイ達によって母屋への廊下ではなく庭の方へ案内された。

ゲンドウの家の庭には樹齢900年の楠の大木がそびえ立っていた。その存在感に圧倒されたシンジ達はしばらく楠の大木を見つめて立ちつくしていた。

「すごい大きい木だね」

「そうだね」

シンジはライトのつぶやきに穏やかな口調でそう答えた。
そしてゲンドウとユイが母屋の方からゆっくりと歩いて来る。
ユイの姿を見たシンジの表情が険しくなった。
しかし、ユイの方は悲しみを瞳一杯に溜めているように見えた。

「シンジ、本当にごめんなさい」

シンジが何かを言う前に、先手を打って謝って来たのはユイだった。
目の前で頭をユイに下げられたシンジは驚いてすっかり毒気を抜かれてしまった。

シンジは下げたまま頭を上げようとしないユイに優しく声を掛ける。

「母さん、顔を上げてよ」

「ああシンジ、本当にごめんなさい。私はすっかり愚かな考えにとりつかれていたのよ」

ユイは悲しそうな顔でそう言って、楠の大木へと視線を向けた。
シンジ達も釣られるように楠の大木を見つめた。

「何かを成し遂げるには人の一生は短い。そこで我々はこの樹のよ
うに何百年も生きられないか考えた」

「それが私の提唱した人類補完計画、そしてその答えがエヴァだったのよ」

ゲンドウとユイは過去を悔いるような暗い口調で告白をした。

「そんな考えのためにアタシのママは犠牲にされたのね」

アスカが母親の事を思い出して苦しそうな顔になった。

式号機に精神だけ取り込まれたアスカの母親は、生きた人間としてサルベージする事は不可能だったのだ。

受け皿となるべきレイのスペアの体は全て破壊された後だった。

「キョウコさんの事は私がいくらあなたに謝っても謝りきれないわ」
「いや、ユイが居なくなっただ後も計画を続行させた私が悪いんだ」

庭に土下座をして謝り始めたユイとゲンドウを見て、アスカとシンジは顔を見合わせてため息をついた。
ユキとライトは不思議そうにそんなユイとゲンドウを見ている。

「お父さん、お母さん、碇君達は絶対に許さないと言っているわけじゃないわ。それならここに来ないはずでしょう？」
「そ、そうか」

レイに言われて、ゲンドウとユイは恥ずかしそうに立ちあがった。
そんな2人にアスカがため息交じりに声を掛ける。

「きっとあの時はネルフやゼーレ全体が狂気に包まれていたから、仕方無かったのよ」

「でも、私は償いをしなければいけないと思うのよ」

「じゃあ、アタシはユイさんと司令に自分から不幸になろうとする事を禁止するように命令するわ」

「ありがとう、アスカさん……」

アスカがユイに向かってそう言うと、ユイは嬉し涙を流してうなずいた。

自分より早くアスカがユイを許してしまったので、シンジは困った顔でゲンドウと目を合わせてから苦笑した。

「ドイツの店の調子はどうか？」

「うん、常連のお客さんもたくさんできたし、仕入れルートも安定して軌道に乗ってるよ」

「ええ、特に海鮮料理の材料は日本の北島さんにお世話になってるのよ」

ゲンドウに聞かれたシンジとアスカは笑顔でそう答えた。

まさか北島サブが本名だとはシンジ達は思ってもみなかった。

彼の父親が演歌が好きだったのだが、役所で母親が止めて話し合いの結果その名前になったらしい。

「そうか、その北島さんは日本とドイツを往復しているのか？」

「遠洋漁業をしているみたいだよ」

ゲンドウが尋ねると、シンジはそう答えた。

「今度はお義父様とお義母様とでお店にいらして下さい」

「私も碇君とアスカさんのお店に行ってみたいな」

「もちろん、レイ達も歓迎するわよ」

「今度は私がおごとと言う事は無いのだな？」

「大丈夫だよ、あの時は父さんを少し懲らしめようと思ったただけだから」

「そ、そうか、わははは！」

ゲンドウ達は大声を上げて笑った。

しかし、ゲンドウはあの時の事を思い出して背中に冷汗をかいていた。

「ほらユキ、ライト、お祖父ちゃんとお祖母ちゃんにこんにちは、

って」

シンジが立っていたユキとライトの背中に手を当てて促すと、2人は少し恥ずかしそうに頭を下げた。

「名前は碓君が付けたの？」

「アスカと話しあって決めたんだ。ユキは希望が有るようになって。ライトは未来を照らす光りになるようになってね」

レイの質問にシンジは笑顔でそう答えた。

「その子の名前は何て言うの？」

「ミサキよ」

アスカがレイの抱えている赤ん坊の名前を尋ねると、レイはそう答えた。

「もしかして、ミサトさんと関係があるの？」

「ううん、そう言うわけじゃないけど、美しく咲く花のように可愛い子になって欲しいって付けたの」

シンジの質問にレイは首を横に振った。

「私も、ユキとライトに近づいて構わないだろうか」

「もちろん、構わないよ父さん」

遠慮がちにゲンドウが尋ねると、シンジは笑顔でうなずいた。しかし、そのゲンドウの動きをユイが手で止める。

「あなた、ちょっと待って下さい」

「どうした、ユイ？」

シンジ達もユイの行動の意味が分からず、不思議そうにユイに視線を集中させた。

「その前に、私とシンジの絆を取り戻させて」

ユイはそう言って、シンジを抱き締めた。

シンジも嬉しそうにユイの抱擁を受け入れる。

「やっと、僕の事を”見て”くれたんだね、母さん……」

シンジのつぶやきを聞いたアスカの目から涙があふれ出した。

自分は望んでも、もう叶わない母親の抱擁。

アスカは悲しみをこらえながらもシンジを祝福する。

「シンジ、おめでとう」

「ありがとう」

シンジはユイから体を離してアスカにお礼を言った。

ユイは目に涙を浮かべているアスカに優しく声を掛ける。

「私ではキョウコさんの代わりにはなれないかもしれないけど」

「ママっ！」

アスカはそう言って開かれたユイの胸元に飛び込んだ。

「アスカちゃん……」

ユイはアスカの耳元で優しくつぶやいて抱き締めた。

「ねえパパ、ママは何で泣いているの？」

「ママはね、とっても嬉しくて泣いているんだよ」

「嬉しくても泣くんだね」

シンジの説明に、ユキは納得したようにうなずいた。

落ち着いたシンジ達はゲンドウ達の近況を尋ねた。

「お義父さんには、僕が経営する医療機器メーカーの会長さんになつて頂いているですよ」

シンジの質問に、レイの夫がそう答えた。

レイの夫は京都に本社を構える医療機器メーカーの社長だった。

ネルフと研究所を去ったゲンドウとユイはのんびりと過ごしながらレイの夫の会社に協力をしているのだった。

「医療行為と言うのは、人間の寿命を延命する手段でしかありません、ですから……」

「分かってます、僕は”永遠の命”なんてものを求める事に怒っていただけです」

ゲンドウを擁護しようとするレイの夫にシンジは優しく答えた。

「ゲンドウさんが必死に説得してくれても覆らなかった私の考えを変えてくれたのは、ミサキちゃんなのよ」

ユイは目を細めてしんみりとそうつぶやいた。

「レイが私の研究室にやって来た時、抱かれているミサキちゃんを見て、私の体に衝撃が走ったわ。だってとっても可愛いんですもの」

「可愛いは正義」

ユイに強くうなずいたレイの言葉に、誰もツツコミを入れずにスルーした。

「そしてミサキちゃんと触れて行くうちにね、人が永遠に生きる事よりも大切な事があるように思えたのよ」

「親から子へ人の想いは受け継がれる。進む道が違っててもな」

ゲンドウは強くそう言い放った。

「一番大切なのは、みんなが健康に過ごせる事じゃないのかなと思っただのよ」

「だから私達は医療に関係する仕事に携わる事にしたのだ」

「本当にその通りだね」

ユイとゲンドウの言葉にシンジはうなずいた。

その後、シンジとアスカはユキとライトをゲンドウとユイに預け、京都市内の神社に家族の健康を祈りに行った。

「僕達、ユキとライトのためにもいつまでも元気で居なくちゃいけないよね」

「それなら、とっても元氣の出るおまじないがあるわよ!」

アスカはそう言うと、シンジに飛びついて唇を重ねた。

「なるほど、これはとっても元氣がでそうだね」

「でしょ?」

シンジとアスカは顔を合わせて微笑み合った。

「それじゃあ、もう一回！」

「おいっ！」と神社に居た人々の誰もがシンジとアスカのバカップルに心の中でツツコミを入れたのだった。

おまけ 式波・アスカ・ラングレーの降格

これはおまけのギャグ小話です。

作者はエヴァンゲリオン新劇場版「序」「破」や戦車の事は良く知りません。

2016年、冬。全ての使徒が倒され、エヴァンゲリオンが不要となったこの世界。

式波・アスカ・ラングレーはネルフから除籍され、ユーロ空軍のパイロットに復帰した。

ユーロ軍のエリート中のエリートとして、彼女の輝かしい戦歴が始まる……と思われたのだが。

「ラングレー大尉に誕生日プレゼントだ」

そう言つて上司が彼女に渡した書類には以下の事柄が書かれていた。

辞令

式波・アスカ・ラングレーを陸軍部隊へと転属する。

軍の花形である空軍から日陰部隊である陸軍への転属。

それは遠回しの左遷。

しかし、彼女はプライドを失った代わりに幸福を手に入れた。

「アスカ、運転中に食事をするなんて、無茶だよ」

「うるさいわね、アタシはハンドルを握っていて両手がふさがっているんだから、シンジがアタシに上手く食べさせてよ」

戦車は運転手と砲撃手の二人一組で乗り込むのが通常である。

アスカはシンジと肩が触れ合うほど距離が近い日々を送った。転んでもただでは起きない。

アスカはそんな女性だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8523v/>

エヴァンゲリオン式号機パイロット・惣流アスカの更迭

2011年11月12日22時18分発行